

〈翻訳〉

ユンカー・フォン・ランゲック著
『瑞穂草，第二部，雑学の部』より

第1章 日本の文学 言語の構造ならびに日本人の文学と詩歌(2)

熊谷知実

4. 日本語の構造

4-1. 膠着語の特徴：助詞

日本語はアルタイ語族に属して⁽¹⁾いて、アルタイ語の言語構造のあらゆる特徴を備えている。膠着語の一種であることから、語根が変化することはない。ヨーロッパ言語の特徴ともいえる語形変化の代わりに、音節ないし助詞(接続詞)のようなものが語頭音の後ろにつけられる。ドイツ語の完了形に用いられる ge- といった変化の前綴りや、ラテン語やギリシア語の完了形に用いられる二重母音は、日本語にはまったく存在しない。日本語の語形変化の乏しさは、この助詞(接続詞)を多用することで補われているのである。

4-2. 品詞の分類：変化しない〈な(名)〉、変化する〈ことば(詞)〉、助詞〈てにをは〉

日本語の単語は、〈名〉、〈詞〉、〈てにをは〉という三階級に分類されている。「名前」を意味する〈名〉に相当するのが、名詞、代名詞、数詞であり、「語」を意味する〈詞〉に相当するのが、動詞と副詞である。日本人の文法学者が「文法規則」と呼んでいる〈てにをは〉表現に、特に重要な意味はない。これは最も頻繁に使用される四つの助詞「て、に、を、は」(*)が合体した表現にすぎない。〈てにをは〉は、冠詞や前置詞の代

わりとして、形容詞をつくるときや動詞を活用させるときに用いられる助詞であり音節なのである。

この分類法は、日本語の構造には極めてかなっていて、文の主成分と文の従属成分に品詞を区分することを分類の基礎としている。文の主成分に相当するのが、変化しない文成分〈名〉と変化する文成分〈詞〉である。文の従属成分においても同様の分類が可能であり、動詞の変化語尾と助詞、すなわち〈てにをは〉がこれに相当する。ということで、日本語の文の成分は、次の四階級に分類することができるだろう。

1)	変化しない文の主成分	〈名〉
2)	変化する文の主成分	〈詞〉
3)	変化しない文の従属成分	〈てにをは〉
4)	変化する文の従属成分	

この分類法は、東京の英国公使館の通訳官 G. W. アストン⁽³⁾氏が提起したもので、彼の日本語文法書に導入されたあと、やがて新しい文法学者に取り入れられていった。

「日本語文法入門書」にあたる、源(鈴木)重胤(1845年)の国民的文法書〈詞捷徑(ことばのちかみち)⁽⁴⁾〉(**)によると、〈名〉が静の言葉の〈みことば〉であり、それに対して動の言葉が〈はたらきことば〉で、行動する言葉、積極的な言葉に相当するという。〈みことば〉に含まれるのが変化しない文成分、〈はたらきことば〉に含まれるのが変化する文成分である。ここで注意しておかなければならない点は、「行為」を意味する〈はたらき〉という表現が、能動態の動詞に一般に想定される意味とは関連していない点である。

文語は表現や形式に弱干の変化をつけることで、口語と区別している。次に簡潔にまとめた文成分の話では、文語と口語に共通にみられる特徴を考察することになるだろう。

(*)〈て〉は、現在形と完了形をつくるときに用いられる。〈に〉は、「～の中に、～へ、～の方へ、～の上へ、～を通して」の意である。〈を〉は単に目的語の助詞として用いられるか、他動詞ないし再帰動詞の目的語として、または受動態の動詞の主語に後置される。〈は〉は、文の主語と関係している。

(**)〈ことばのちかみち〉の〈ことば〉は、「言語，単語」という意味。〈ちかみち〉は「近い道」のこと、〈近い〉は短いという意味で、空間的広がりを表している。〈みち〉は、「道路，街道」のこと。〈み言葉〉の〈み〉は、「休む」という意味の古い動詞〈いこい〉の語根である。〈はたらき〉は、「行動，動き」のこと。

4 - 3. 〈名〉：名詞

1) 〈名〉：変化しない文成分

a)名詞には、性の規定はない。数詞の変化も、関係(語尾)変化もない。

性は、文章の意味から判断するか、あるいは男性には〈を〉か〈おん〉、女性には〈め〉といった語を前に置くことで性別を明らかにさせる。例えば〈馬〉でいえば、〈おうま〉は「牡馬」の意味になり、〈めうま〉は「雌馬」の意味になる。または〈大和〉言葉を後に置くこともある。「少年，子供」の意味の〈こ〉、同様に「女性」には〈め〉を後に置くことで、〈むすこ〉は「息子」の意味となり、〈むすめ〉は「娘，少女」の意味となる。

複数形は、言葉を繰り返すことでつくられる。例えば「国」を表す〈くに〉は〈くにぐに〉と繰り返して表現することで、「諸国」の意味となる。または複製を意味するなんらかの形容詞を前に置くことでも、複数形はつくられる。例えば「月」を表す〈げつ〉が、「数か月」を意味する〈すうげつ〉となり、「国」を意味する〈くに〉が、「諸国」を意味する〈しよこく〉となるように。

4 - 4. 代名詞

格変化は、〈てにをは〉という成分を後に置くことで表現される。

b)アリア語の意味における人称代名詞と所有代名詞は日本語にはな

く、動詞は人称変化すらしめない。しかし名詞の規則に従って、日本や中国起源の様々な語で代用されている。語法においては、社会的地位に与えられる様々な称号を用いることで、人称が区別されている。通常、話者は相手よりもへりくだった名称を自分用に選ぶ。この点において、日本では極めて厳格な礼儀作法が支配している。例えば〈私〉を指す通常の呼称には、「利己心、個人の関心」を意味する漢字があてがわれている。「私の」は、〈私〉に属格の助詞〈の〉を添えることでつくられる。例えば「私の父親」を意味する場合は、〈私の父〉といった具合に。だが話者が相手より低い身分の場合には、〈大和〉言葉で「愚かな」を意味する〈僕〉、ないし中国語で「家臣」に用いられる〈臣〉が用いられるだろう。〈臣〉は行政に請願する際に、「愚かな」を意味する接頭語〈愚〉を添えることで、「私」の代わりに役割を果たす。階級の肩書きが極めて忠実に保たれている〈忠臣蔵〉においては、「私ごとき取るに足らぬもの」という意味で〈愚臣〉が用いられている。〈愚〉は合成語となることで、「私の」の代わりに務めることもある。例えば、〈愚妻〉が「私の妻」という意味となり、〈愚案〉が「私の見解、意見」という意味になるように。ただし〈帝〉だけには、古い言葉〈朕〉を用いる特権が与えられている。この表現は、「我は神の恩寵により」に相当するだろう。

二人称や三人称の名称にも、同様の指摘が可能である。しかしこれについて、私は詳細に語るつもりはない。文法を語るのではなく、日本語の独自の構造についてわかりやすいイメージを描きだすことが、本書の意図だからである。

指示代名詞、疑問代名詞、関係代名詞、不定代名詞などの使い分けについては、特別な規則がある。

4-5. 数詞：漢数字

c) 同様に、数字は変化しない。

基数として用いられるのは、一から十までの古い〈大和〉数字(十一以降

はない)，そして〈万〉まで順番に揃っている中国数字である。大きな桁の数字は，乗数を前に置くことで表現される。例えば，150,000は〈十五万〉，すなわち 15×10000 といった具合に。

中国語の基数を以下に挙げよう。中国数字としても，〈大和〉数字としても用いることができる「漢数字」である。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
いち	に	さん	し	ご	ろく	しち	はち	く	じゅう

11	12	20	30	40	50	60	70	80	90
十一	十二	二十	三十	四十	五十	六十	七十	八十	九十
じゅういち	じゅうに	にじゅう	さんじゅう	しじゅう	ごじゅう	ろくじゅう	しちじゅう	はちじゅう	くじゅう

100	500	800	1,000	10,000	150,000	1,000,000
百	五百	八百	千	萬	十五萬	百萬
ひゃく	ごひゃく	はっぴゃく(*)	せん	まん	じゅうごまん	ひゃくまん

(*)〈ひ〉は〈まる〉を付けることによって〈び〉に代わる。発音としては〈はっぴゃく〉である。〈はち〉に代わる合成語としての〈はつ〉は，古い古典形式である。

続いて，文学作品と口語で用いられる〈大和〉の基数を以下に挙げよう。

1	2	3	4	5
ひとつ	ふたつ	みつ	よつ	いつつ

6	7	8	9	10
むつ	ななつ	やつ	ここのつ	とお

これ以外の表現は、〈大和言葉〉または〈古い言葉〉で書かれた作品の中に、極めてまれに残っているだけである。

序数は、中国語の基数に、「番人」を意味する〈番〉という漢字を付け加えることでつくられる。例えば、第一は〈一番〉という具合に。例外として、第四だけは〈しばん⁽⁵⁾〉ではなく〈よばん〉と発音されている。

その他の数字の形は、〈大和〉言葉でも中国語の基数でも、普通名詞を後に置くことでつくられる。例えば「度」は、日本の〈大和〉言葉の基数では〈たび〉、中国語の基数では〈ど〉として発音されている。あるいは「層、幅、折り目」という意味の「重」をつけて、〈へ〉ないし〈え〉と表現されることもある。例えば、「一回」を〈ひとたび〉、「六回」を〈ろくと〉、「十回」を〈とへ〉というように。ここで注意しなければいけない点は、頻度の高い普通名詞は、その概念の違いで使い分けられる点である。例えば、反物を数えるときには〈たん〉で、「織物一卷」を表現するときは〈きぬいつたん〉（発音としては「いったん」、合成語になると「いち」の代わりに「いつ」となる）、「織物五枚」を表現するときは〈ぬのごたん〉というように。細長い物を数えるときには、棒を表わす〈本〉という表現が用いられる。例えば、「九本の筆」を表現するときは〈ふでくほん〉、「十二本の針」を表現するときは〈はりじゅうにほん〉といった具合に数えられる。

4-6. 〈詞〉：動詞の語根

2) 〈詞〉または〈はたらきことば〉：変化する文成分

a) 動詞

特に注意を払わなければならないのが、名詞(基礎の語根)または副詞(連用の語根)となる動詞の語根、名詞または形容詞をつくるときに用いられる動詞の語根である。それらはふたたび動詞を派生させるからである。例えば、「よい」を意味する〈よ〉ないし〈よい〉という語根は、〈よろこび〉という名詞を派生させる。そこから「喜ぶ」という意味の動詞〈よろこぶ〉が派生する。〈よ〉は〈よく〉の短縮形で、同時に「よいです」とい

う意味の動詞として、動詞のあらゆる活用変化をする。形容詞の語根に語末音〈く〉をつけることでつくられる語は、名詞として用いられることもあるが、やはり動詞形のほうが一般的である。すなわち日本語文法においては、形容詞が動詞と並べられるのである。形容詞が動詞に変化して形容動詞となると、音節が語尾について独自の変化をする。

副詞の語根の例を、次に挙げよう。「最短距離の道を走ってくる」ことを、〈ちかくはしりきたる〉と表現する。これは急ぐという意味である。この例では、「近い」の短縮形である〈ちかく〉と「走る」という意味の〈はしり〉は、「来る」を意味する〈きたる〉と同等の関係にある。両者ともに「来ること」の性質と方法を表している。このように動詞の語根は、異なった動詞の主根または形容詞から派生した語根と合成して用いられることがある。〈詞捷徑〉においては、「不安定な(変化する)語を完全にさせる」副詞〈続用言〉の代わりに、動詞の語根が紹介されている。(＊)

語根の顕著な特徴といえ、日本語の語順の規則に従って、二つ以上の動詞や形容詞が文中に並ぶとき、後者の語根だけが変化して、前者の語根の形は変化しないまま残ることであろう。例えば、「大地に亀裂が入り、山々が崩壊し、川が逆流する」さまを表現する〈ちさけ、やまおちいり、かわさくしまにながる〉(**)という文では、〈さけ〉と〈おちいり〉という動詞が連用形で、最後の〈ながる〉だけが語尾変化している。

このような形は、「変化する語の等位」として〈連用言〉(***)と呼ばれている。

- (＊) 〈ぞくようげん〉の〈ぞく〉は、「完成させること、補完」を意味する。〈よう〉は「用事、有益に使えるもの」の意。〈げん〉は〈げんごん〉の最初の音節。「単語、言語」を表わす〈言葉〉と同じ意味である。
- (**) 〈ち〉は「大地」の意。〈さけ〉は「分裂すること。〈やま〉は「山岳」の意。〈おちいり〉は「高みから落ちる」を意味する〈おち〉と、「入る、歩み入る」を意味する〈いり〉。〈かわ〉は「河川」の意。〈さかしま〉は古めかしい表現で、「正反対に、真っ逆さまに、対極の方向に」を意味する。〈さ

か)は「逆の」のことで、〈しまい〉は「終わり、終わること」。〈に〉は方向を示す助詞。〈ながる〉は「流れる」こと。

(***)〈れんようげん〉の〈れん〉は「列、連続」のこと。数詞の説明箇所でも言及したが、〈れん〉は、普通名詞を数えるときに使用される表現のひとつで、紐に繋がれている物を数えるときに用いられる。例えば、〈玉百八連〉といえ、仏教徒のロザリオ(数珠)の珠の数である百八個の真珠を指す。〈ようげん〉は上記と同様。

4-7. 動詞：終止形

日本語の動詞には、語尾変化がある。動詞に変化語尾のようなもの、あるいは助詞〈てにをは〉が直接つけられるか—このうち変化するものを「主根」、変化しないものを「副根」と呼ぶことにしよう—または形容詞の語根のように、「～である」を意味する助動詞〈ある〉がつけられることによって、人称変化させられるのである。人称と数の規定は、日本語の動詞にはない。

日本語に時制は三つ存在する。現在形、過去形、そして未来形である。現在形には、言語的な特徴がまだいくつか根強く残っている。すなわち日本人は、終止形とそれに相当する分詞、連体形または名詞形とそれに相当する基本形(不定形)を、それぞれ分けて考えているのである。終止形は、〈きることば〉(分離や分断を意味する「切り」ないし「切る」の意)と呼ばれている。動詞の終止形は、必ず文章の最後を締めくくるようにして置かれるからである。〈きることば〉は極めて限定された意味でしか、現在形として受け止められることはない。時制表現に関して、日本語は極めて漠然としているからである。上記の文例として、「川が流れる」ことを意味する〈かわながる〉を挙げよう。この文の動詞〈ながる〉は文語であり、川の流れる様子を一般に表しているにすぎない。今流れているのか、過去に流れていたのか、未来になってようやく流れるのかは不明瞭なままで、文全体の意味から時制を推測しなければいけない。しかし過去形と未来形には特別な変化語尾があるため、時制の混同はおそらくまれにしか起こら

ないだろう。終止形は、日常生活の口語からは次第に消えつつある。後に解説するが、丁寧語をつくるときの意味のない助動詞〈まし〉がかろうじて例外的に残っているだけで、今では大部分が修飾形や名詞形に取って代わられてしまっているのである。一方で文語にはこの終止形はまだ残っていて、あまり洗練されていない名詞形にも取って代わられていない。終止形は、日本人の歴史的現在形である。

4-8. 動詞：連体形

連体形または名詞形(修飾形)は、〈詞捷徑〉や他の国民的文法書の中では、〈続体言〉(*)「名詞を補足して完全なものにする語」、すなわち形容詞と呼ばれている。この形の動詞は、様々な用法で用いられている。

連体形ないし名詞形は、形容詞として用いられる場合、いわゆる分詞の役割を果たしているといえよう。終止形同様に、この用法には時制の規定がなく、三つの時制のうちどれを表現しているのか、話題の脈略から推測しなければいけない。例を挙げると、「理解できないこと、無意味」を意味する〈わからぬこと〉、「未知の国」を意味する〈しらぬくに〉など。(〈わからぬ〉は「理解する」という意味の〈わかり〉、〈しらぬ〉は「知っている、わかっている」という意味の〈しり〉を否定する現在形である)

または、不定詞の基本形のように用いられて、二重の意味をもつこともある。例えば、「貸す」を意味する〈かし〉からきた〈かす〉は、「貸してくれる人」にも「貸すこと」にもなりうる。ドイツ語の die Güte という語が、「よい人間」や「よいもの」、「よいこと」を意味しているのと同様である。強調の助詞〈ぞ〉や疑問の助詞〈や〉がついた場合、質問のあとには、終止形となることもある。

(*) 〈ぞくたいげん〉の〈ぞく〉は「補足」のこと。〈たい〉は「肉体、物質」のこと。例えば〈かみはいったいいつたい〉という文では「それは神にほかならない」と解釈されるが、上記の合成語では、〈たい〉は「名詞」という意

味になる。〈げん〉は「言葉」を表わす〈げんごん〉である。

4 - 9. 動詞の形態

日本語の動詞には、きわめて多様な述語の形態が存在する。これまで言及してきた形の他に、原形(不定形)、分詞、条件形、前提(仮定)形、推量(蓋然)形、譲歩(容認)形、頻度または反復形、願望形がある。最後に敬称形を挙げることにしよう。

4 - 10. 敬称形

最後に挙げる敬称形は、日本語のきわだった特徴のひとつであり、この民族の礼儀作法の儀礼的性格を解明してくれるものである。すでに言及したように、その特徴は人称代名詞と所有代名詞の一人称並びに三人称において、多岐に及んだ表現方法に表れている。

敬称形は、口語にも文語にも用いられている。この目的にしか使われない、それ以外では意味のなさない助動詞〈まし〉の終止形〈ます〉または連体形〈まする〉を、語根の後ろに置くことでつくられる。〈まする〉は、口語において上品さで秀でていいる。それに対して上品さに欠ける〈ます〉は、文語で定着している。語根と終止形が合成されることで強調された〈まします〉も同様である。この助動詞の他にも、口語や書簡体、多方面の文語に用いられている言葉がいくつかあるのだが、ここでその評価をすることは、本書の目的からは逸脱するだろう。

4 - 11. 活用変化

日本語の動詞には五つの活用変化があり、そのうちの三つが動詞の語根、二つが形容詞の語根(派生させられた語根)である。第一変化に相当するのは、主根が〈い〉で終わる派生させられない動詞の大部分である。その特徴としては、否定形を作るときに、主根の代わりに変音した副根が基礎となる点、活用して様々な変化が起こっても、その音節数は増えないという点が

挙げられる。第二変化の派生させられない動詞の数は限られている。受動態の(受身の)すべての動詞と、因果関係の(原因の)動詞の大部分である。その主根は〈い〉か〈え〉で終わり、結合形をつくるときにも用いられる。連体形と過去形は、語根より一音節増える。口語においては、これらの形の語根が〈い〉で終わる場合は〈いる〉と〈いれ〉となり、語根が〈え〉で終わる場合は〈える〉と〈えれ〉となる。文語においては、これらの語末音は極めてまれにしかつかないが、古典的な語末音〈うる〉と〈うれ〉がより古くて正しいものとして受けとめられている。唯一の例外が、「打つ、蹴る(馬でよく使われる)」を意味する動詞〈ける〉である。これが文学作品中で〈くる〉として活用することはない。

第三変化には、九つの動詞しか該当しない。すべてが一音節で、語根は〈い〉で終わる。これらの動詞は、基礎的語根から否定形をつくり、同じ形の終止形と連体形を持っている。

連体形の語根を持つ動詞は、形容詞の語根に〈む〉や〈する〉や〈る〉という語末音をつけてつくられる。大部分の動詞が第一変化であり、第二変化に相当するのは、〈し〉か〈じ〉の語根で終わる動詞だけである。

4-12. 受動態

日本語の動詞は、能動態(関連するのは他動詞、関連しないのは自動詞)、変化語尾や先述した語根の変音でつくられる否定形、そして受動態といった形をとることで用いられる。

だが日本語の動詞の受動態は、ドイツ語の受身の用法には相当しない。受動の動詞は、むしろ能動態で派生させられた動詞なのである。両者は語形変化が等しいだけでなく、あえて表現させて頂いてもよいのであれば、意味に応じては行為受動を能動態で伝えることもあるのである。例えば、「生み出す」を意味する〈うみ〉は、「生み出される、生まれる」を意味するときは〈うめ〉となる。「～である」を意味する〈なり〉は、「～になる」を意味するときには〈なれ〉となる。「売る」を意味する〈うり〉は、

「売られる, 売られている」を意味するときには〈うれ〉となる。「見る」を意味する〈み〉は, 「見られる, 見える, 現れる」を意味するときには〈みえ〉となる。そして「聞く」を意味する〈きき〉は, 「聞かれる, 響く, 鳴り響く」の意味のときには〈きけ〉となるのである。その他の受動のつくりかたとしては, 「聞かれている対象」を意味する〈きこへ〉という語から, これまで何度も言及してきた「声, 音」を表わす単語〈こへ〉が派生するという例がある。

極めて少ない数ではあるが, 不規則な動詞と不完全な動詞もある。

次に挙げる表は, 語尾が変わることによって, 動詞がどのような変化を遂げていくのか, 短く概観した例である。最初の表は, 口語でも文語でも一般的に用いられている活用形である。

二番目の表は, 第一変化の活用語尾の例として, 規則的な基礎(動詞の)語根からつくられた「貸す」を意味する動詞〈かし〉がどのように変化しているのか, そして主根と副根の違いがどこに現れているかを表している表である。文語の活用語尾には, 重要ではない差異がいくつか生じることがある。同様の差異は, 不規則動詞と形容動詞にも生じることがある。

4 - 13. 活用変化の例

I. 一般的な活用の例									
	動詞の語根							形容詞の語根	
	規則			不規則					
	第一変化 〈かし〉 「貸す」	第二変化 〈たべ〉 「食べる」 〈でき〉 「できる」	第三変化 〈み〉 「見る」	〈あり〉 「ある」	〈き〉 「来る」	〈し〉 「する」	〈いに〉 「行く」 「去る」	第一変化 〈よい〉 「良い」	第二変化 〈あし〉 「悪い」
基礎的 副詞的 語根	かし	たべ でき	み	あり	き	し	いに	よく	あしく

終止形	かす	たぶ でく	みる	あり	く	す	いぬ	よし	あし
連体形 あるいは 名詞形	かす	たぶる でくる	みる	ある	くる	する	いぬる	よき	あしき
否定形と 未来形の 副根	かさ	たべ でき	み	あら	こ	せ	いな	よく	あしく
(7) 過去形 (*)	かせ	たぶれ でくれ	みれ	あれ	くれ	すれ	いぬ いぬれ	よけれ	あしけれ

II. 第一変化の例

連体形ないし名詞形	〈かす〉「貸す」	
主根	〈かし〉「貸す」	
過去分詞	〈かして〉	貸した状態で、貸しながら
過去形	〈かした〉	貸した
条件形(過去形の)	〈かしたれば〉	貸すなら、貸したなら
前提形(過去形の)	〈かしたらば〉	貸したとしたら
推量形(過去形の)	〈かしたら〉	貸したかも、おそらく貸した
譲歩形(過去形の)	〈かしたれど(も)〉	貸したとしても
頻度形	〈かしたり〉	何度も貸す
願望形	〈かしたい〉	貸したい、貸す願望がある
丁寧形	〈かします〉	貸します
否定や未来形の副根	〈かさ〉	
否定を表す現在形	〈かさぬ〉	貸さない
否定を表す過去形	〈かさなんだ〉	貸さない、貸さなかった
否定を表わす条件形	〈かさねば〉	貸さないなら
否定を表わす前提形	〈かさずば〉	貸さないのだとしたら
否定を表わす譲歩形	〈かさねど(も)〉	貸さないとしても
否定の分詞	〈かさで、かさず、かさずに〉	貸さないでおきながら

前提形	〈かさば〉	貸すのであれば
形容詞的に用いられる否定形	〈かさない〉	貸さない状態で
未来形	〈かさお(かそう)〉	貸すだろう
終止形を表わす現在形	〈かす〉	
否定の命令形	〈かすな〉	貸すな
否定の未来形	〈かすまい〉	貸さないだろう
第二の副根	〈かせ〉	
命令形	〈かせ〉	貸せ
条件形	〈かせ〉	貸すなら
譲歩形	〈かせど(も)〉	貸しても

ここに紹介したのはわずかな例であるが、日本語の動詞の特徴を表すには十分であろう。

4 - 14. 形容詞

b) 〈ことば〉には、〈形容詞〉(〈けいよう〉)とは、形や見かけのことも含まれている。形容詞は、膨大な数の変化語尾のようなものを根語につけてつくられる。これを説明するために、よく使用されている形容詞の例をいくつか挙げよう。例えば、ドイツ語の語尾 *-isch* に相当する〈らしい〉や〈らしき〉で終わる形容詞は、名詞からつくられる。例えば、「子供のよな」を意味する形容詞〈こどもらしき〉では、〈こども〉という語は「子」を意味している。「女のよな」を意味する形容詞〈おんならしき〉では、〈おんな〉という語は「女性」を意味している。〈しき〉は、変化しない語につくか、あるいは通常は語末音が変化する動詞の語根と結びついて、*-ig*, *-lich*, *-bar*, *-sam* というようなドイツ語に訳することができる。例えば、「通常でない、過度の」を意味する形容詞〈はなはだしき〉では、〈はなはだ〉という語は「とても」を意味している。「一様な、類似した」を意味する形容詞〈ひとしき〉では、〈ひと〉という語は「一つ」(合成語

でのみ)を意味している。「恐ろしい、ひどく嫌な」を意味する形容詞〈おそろしき〉では、〈おそれる〉という語は「怖がる」を意味している。「愛らしい」を意味する形容詞〈このましき〉では、〈このむ〉という語は「何かを喜んでもち、楽しむ」を意味している。

この他に考えられる形容詞の語尾としては、〈けく〉や〈けき〉が挙げられるであろう。これらは形容詞本来の意味を変えることはないが、今ではもっぱら古い散文と詩歌にしか使用されていない。例えば、形容詞〈ながけく〉は、〈なが〉または〈ながい〉と同じ意味であり、(容積単位で)「長い」ことを意味している。

形容詞が合成される場合、最初にくる語は名詞か動詞の語根、または他の形容詞の語根のいずれかであろう。例えば、「器用な」を意味する形容詞〈てばやき〉は、「手」を意味する名詞〈て〉と、「速い」を意味する形容詞〈はやき〉から合成されている。「有名な」を意味する形容詞〈なたかき〉は、「名前」を意味する名詞〈な〉と、「高い」を意味する形容詞〈たかき〉または〈たかい〉から合成されている。「不可避な」を意味する形容詞〈のがれがたき〉は、「避ける、逃げおこせる」を意味する動詞〈のがれる〉と、「困難な、固い」を意味する形容詞〈かたく〉から合成されている。「簡単になしうる」を意味する形容詞〈しやすき〉は、「行う」を意味する動詞〈する〉と、「容易な、安価な、たやすい」を意味する形容詞〈やすき〉から合成されている。

形容詞が置かれる場所は名詞の前であり、形容詞に語尾変化はない。例えば、「古い」を意味する形容詞〈ふるい〉と「年」を意味する名詞〈とし〉が一緒になると、〈ふるいとし〉となるように。

比較級は、副詞や助詞が後に置かれることで表現される。最上級をつくるときには、「一」を意味する数詞〈いち〉が使われることもある。例えば、〈さくじつよりこんにちはてんきよろし〉、これを逐語訳すれば、〈昨日より〉〈今日は〉〈天気〉〈よろし〉となる。〈ながさききうしういちのよきみとなり〉、これを逐語訳すれば、〈長崎〉〈九州一〉〈良き〉〈港〉

〈也〉となる。

4-15. 〈てにをは〉

3) 〈てにをは〉は、先ほど言及したように、変化しない文成分と変化する文成分に分けられる。このうち変化しない文成分は、変化しない品詞〈な〉、もしくは変化する品詞〈ことば〉の後に置かれる。

4-16. 語尾(冠詞)

変化しない成分に関しては、ヨーロッパ言語の冠詞の代わりともいえる「語形変化に用いられる不変化詞」の「助詞」を強調しておきたい。これが性と数を表現することはなく、同じ扱いである。「主格」は、当然のことながら助詞を必要としない。「属格」は、古い〈大和〉言葉の助詞〈の〉、または〈な〉、〈つ〉、〈が〉、〈か〉で表現される。「与格」は、「～の方へ」を意味する〈へ〉や〈え〉を用いて表現される。場所や手段や目的は、「～の中に」を意味する〈に〉、「～の方へ」を意味する〈と〉、「～のところで」を意味する〈て〉、〈にて〉、〈で〉を用いて表現される。「目的語の対格」は〈を〉を用いて、「奪格」は〈より〉を用いて場所や由来に関連づけ、〈から〉を用いて理由を告げることもできる。

これ以外にも、ドイツ語の前置詞や接続詞の代わりになるもの、意味を強調するために後に置かれるもの、感情を表現するために独立して用いられるものなど、数えられないほどの助詞が日本語には存在している。動詞の活用変化の例、形容詞に助詞がつけられる場合の例については、すでに考察している。

4-17. 変化する〈てにをは〉

最後にまだ残っているのは、変化する〈てにをは〉である。これまで述べてきた不変化詞同様に、〈てにをは〉は動詞のあとに直接つけられるか、または「～である」を意味する〈ある〉がついた動詞形容詞の後に続ける

ことで用いられる。動詞に直接ついたものは、動詞の語根の後に置かれるときに、動詞の語根を変化させる。例えば、動詞〈つる〉(不規則変化、て、つ、つる、て、つれ)は、「終える、閉める、死ぬ」を意味する動詞〈はつる〉や〈はてる〉に相当するが、この前に置かれている動詞に、この動詞が表わす行為の意味が与えられているのである。次の例文が分かりやすいだろう。〈さげくらいつればいなんという〉、これは「彼らはワインを飲んだあとに、行きたくなかったと言った」という意味である。(＊)

古い文語において、変化する〈てにをは〉は、第三変化動詞の語根の終止形の後に置かれていた。例を挙げると、「～である」の意味の助動詞〈なる〉(なり、なり、なる、なら、なれ)が、終止形として文学作品に用いられている。例えば、「山には昆虫の声が響いている」を意味する〈やまにむしのこへすなり〉のように。(**)

変化する〈てにをは〉の多くは、前に置かれている動詞の意味を強めたり、動詞にもう一つの意味を与えたりする。例えば、可能性や行為の道徳的必要性を表現する〈べき〉、古い用法の〈まほしき〉と新しい用法の〈たき〉、これは両者ともに願望や憧憬を表していて、動詞の希求法のよなものを表現している。

(＊)〈さげ〉は、熱燗で飲む米の蒸留酒のことで、ワインの代わりである。

〈くらい〉は「賞味する(「飲む」の代わり)」の意、〈つれば〉は、〈つる〉の過去の条件形、〈いなん〉は、〈いきなん〉の代わりで、「行く」を意味する〈いき〉ないし〈いく〉の未来形と、古典的な未来の助詞〈なん〉。〈と〉は発言を引用するとき用いられる助詞で、「～ということ」の意味。〈いう〉は、「言う」を意味する〈い〉、〈いふ〉の終止形。

(**)「山岳」を意味する〈やま〉、「～の中に」を意味する助詞〈に〉、昆虫を意味する〈むし〉、〈の〉は属格の助詞で、〈こへ〉は「声」を意味し、〈すなり〉は〈するなり〉の合成語、このうち〈する〉は「行う」を意味する〈し〉の終止形、〈なり〉は「～である」を意味する〈なる〉の終止形。

5. 語 順

最後に、ヨーロッパの言語とは本質的に異なっている日本語の語順について、短い覚書を加えておこう。

a) 不意の文成分もしくは重要ではない文成分は、必要な文成分ないし主成分の前に置かれることで、補足や付け加え、状況規定に用いられる。このようにして形容詞(動詞や形容詞の付加語形)は、形容詞が形容している名詞の前に置かれる。例えば、「良い人間」を意味する〈よきひと〉、「白い金属、すなわち銀」を意味する〈しろがね〉、「やってくる人」を意味する〈くるひと〉などのように。(*)

副詞は、修飾する語の前に置かれる。例えば、「とても速い」を意味する〈いとはやく〉、「とても速く来る」を意味する〈はやくくる〉などのように。

属格の後に置かれるのは、助詞〈の〉または〈が〉であり、そしてそのあとには助詞が支配する名詞が続く。例えば、「年の初め、新年」を意味する〈としのはじめ〉、「天の川、銀河」を意味する〈あまのがわ〉などのように。(**)

b) 主語は、文章を始めなければいけない。例えば、「月はすばらしいものである」を意味する〈つきはめづらしいものなり〉。(***)しかしこの規則には多くの例外があり、比較級のときに、主語と比較される目的語が先に置かれることがしばしばある。例えば、「桜より梅の時期が早い」を意味する〈さくらよりむめははやし〉のように。(*****)

c) 動詞(動詞や形容詞の終止形)は、これまで挙げてきた例のように、文章を終わらせる。しかし文学ではこの規則に収まらず、動詞は助詞〈て、は、ば、と、ど、ども、を〉または副詞(または動詞の副詞形)で終わる文の中間に置かれることがたびたびある。

d) 前置詞ならびに「規定する語がついた変化しないことば」は、それ

が関連づけている名詞と代名詞の後に置かれる。例えば、「この場所へ」を意味する〈ここまで〉、「私の家」を意味する〈われのうち〉などのように。(****)

(*) 〈よき〉は、「良い」の意味であり、〈ひと〉は、「人間 男」のこと。〈しろい〉は、「白い」の意、〈かね〉は「金属」のことである。〈くる〉は、「来る」を意味する〈き〉の連体形。

(**) 〈としまじま〉の〈とし〉は「年」の意であり、〈まじま〉は「最初、発端」の意。〈あまがわ〉の〈あま〉は「天」の意であり、〈かわ〉は「川」の意。

(***) 〈つき〉は、「月」の意味で、〈は〉は、主語を表わす助詞。〈めづらしい〉は、「通常でない、珍しい」などを意味する。〈もの〉は、「物、物体」のこと。〈なり〉は、「～である」を意味する〈なる〉の終止形。

(****) 〈さくら〉は、「桜」のこと。学名は *Prunus Pseudo-cerasus* Lindl. 〈より〉は、比較に用いられる奪格の助詞。〈むめ、うめ〉は、「プラム」のこと。学名は *Prunus Mume* Siebold und Zuccarini. 〈は〉は上述のとおり。〈はやし〉は、「時期的に早い」を意味する形容動詞の終止形。

(*****) 〈ここまで〉の〈ここ〉は「この場所」の意であり、〈まで〉は「～のほうへ、～に向かって」の意味。〈われのうち〉の〈われの〉は「私の」の意で、「私」を意味する〈われ〉に、属格の助詞〈の〉がついている。ここでは人称代名詞を書き換えることで、所有代名詞がつけられている。〈うち〉は「家」の意味である。

e) 目的語は、動詞の前に置かれる。例えば、「川を越える」ことを意味する〈かわわたる〉のように。

f) 前置詞に支配される名詞は、動詞の直接目的語の前に置かれる。例えば、「舟で川を越えていく」という意味の〈ふねにかかわたる〉のように。(*)

g) 主語を述語と結びつける動詞は、最後に来る。例えば、「月はすばらしいものである」を意味する〈つきはめづらしいものなり〉のように。

h)時刻の記載は、場所の記載の前に置かれる。同様に、一般概念も規定概念の前に置かれる。例えば、「いつまでここに住みますか」を意味する〈いつまでここにすむか〉、「六月七日まで」を意味する〈ろくぐわつなぬかまで〉などのように。(**)

i)接続詞と疑問の助詞は、それが関連づける語や概念の後に置かれる。例えば、「彼は来ると言っている」を意味する〈まかるともうす〉、「どんな人間なのかと彼は質問している」を意味する〈いかなるひとかとう〉などのように。(***)

j)副文は、主文の前に置かれる。例えば、「ナイチンゲールのさえずりが谷から高らかに響いてこなければ、春の到来を誰が知るであろうか(春の到来という事象を誰が知るであろうか)」という意味の〈うぐいすのたにからいづるこへなくば、はるくることはたれかしらまし〉のよう。(***)

以上が、一般に通用している日本語の統語論の規則である。民衆が口にするときには、しばしば間違いが生じるものの、文語においてこの規則は完全に効力を発揮している。

(*)〈ふね〉は、「船、小舟」のこと。〈に〉は「～の中に」の意で、〈かわ〉は「川」のこと。〈わたる〉は「境界を渡る、川を渡る」を意味する〈わたり〉の連体形(不定形)。

(**)〈いつ〉は「何時」の意で、〈まで〉は「～まで」のこと。〈ここに〉は「この場所に」の意で、〈すむ〉は「居住する」を意味する〈すみ〉の終止形、〈か〉は疑問の助詞。〈ろく〉は中国語の数で六を意味する。〈ぐわつ〉は「月」の意で、新月の満ち始める月のことである。〈なぬすか〉とは、第七の日の意で、〈ななつ〉は古い〈大和〉の数え言葉「七」を意味する。〈か〉は中国語の「日」であり、日本語では〈ひ〉という。

(***)〈まかる〉は、「行く、帰る、別れる、死ぬ」を意味する〈まかり〉の名詞形。〈と〉は「～ということ」の意。〈もうす、もうす〉は、「言う、話す」を意味する〈まうし、もうし〉の終止形。〈いか、いかが〉は、「いかに、何を、なぜ」の意、〈なる〉は「～である」の意、〈ひと〉は「人間」の意、〈か〉は

疑問の助詞，〈と〉はある発言に関係づける助詞，〈とそう，とう〉は「質問する」を意味する〈とい〉の終止形。

(****) 〈うぐいす〉は日本のナイチンゲールで，学名は *Ficedula coronata* Siebold. 〈の〉は属格の助詞，〈たに〉は「峡谷」の意で，〈から〉は「～の中から」の意，〈いづる，いづれ〉は「出てくる，外へ出てくる」を意味する〈いづり，いでり〉の名詞形，〈こへ〉は「声」の意で，〈なく〉は「叫び声，通常は鳥や四足動物や昆虫の鳴き声や音」を意味する〈なき〉の連体形。〈ば〉は動詞の後に置かれる意味のない接続詞で，〈はる〉は「春」の意，〈くる〉は「来る，到来」を意味する〈き〉の名詞形，〈こと〉は「出来事，事実」の意，〈は〉は主語に関連づける助詞，〈たれ〉は「誰」を意味する代名詞，〈か〉は疑問の助詞，〈しらまし〉は「知る，理解する」を意味する〈しり〉の終止形。

5 - 1. 古典様式の特徴

これとは別に，古典文学で厳格化され，現代の日常文学や大衆作品でおよそかにされがちな規則がある。中国語の文体で，扱いにくく違和感のある言い回しは使用が避けられているのだ。ましてや口語においては，まったく確認できない。

古典的な文体規則の重要な点について，ここでいくつか検討してみよう。

a) 古典的な強調の助詞〈なん〉や〈ぞ〉，または数多くの疑問の助詞のひとつが文中に現れた場合，その文章を締めくくる動詞や動詞形容詞は連体形になる。だが連体形の動詞が，上記の助詞を含まない語のあとにくることもまれではない。その場合は動詞が主格の名詞の代わりとなって，文全体が簡単表現とみなされる。

文中の疑問の助詞〈か〉と〈や〉は，文末で動詞の連体形を支配する。だがその両者には違いがある。〈か〉の前には動詞の連体形が来るのだが，それに対して〈や〉の前には動詞の終止形が来るという点である。例えば，「これはおそらく宝石であろう」という意味の〈これぞたまなるべき〉，「これは私たちが探している(私らが探究の)山である」という意味の〈これやわがもとめるやまなる〉などのように。(*)

b)上記の助詞が文中に含まれない場合、動詞ないし形容動詞は文末で終止形になる。例えば、「梅は桜より時期が早く咲く」を意味する〈さくらよりむめははやし〉のように。

c)強調の助詞〈こそ〉が文中に表れると、動詞ないし形容動詞は文末で過去形になる。例えば、「これだけが宝石である」を意味する〈これこそたまなれ〉や、「米だけが役に立つ」を意味する〈よねこそよけれ〉のように。(**)

(*)〈これ〉は「これ」の意で、〈たま〉は「宝石、(ロザリオの)数珠」の意、比喩的に解釈すれば、象徴しているのは〈たま〉のような魂。〈なるべき〉の〈なる〉は、「～である」を意味する〈なり〉の終止形。これに変化する〈てにをは〉と〈べき〉が加えられて、第一変化で規則的に変化することで、動詞に可能性と道徳的必要性、未来の真相の意味が与えられる。〈わが〉は、「自分の」を意味する所有代名詞。〈もとめる〉は、「何かを探究する」を意味する〈もとめる〉の終止形。〈やま〉は「山岳」の意味であり、〈なる〉は「～である」を意味する助動詞〈なり〉の連体形。

(**)〈こそ〉は、「だけ、ただ～だけ」の意だが、強調の助詞として様々な翻訳される。「これ、これだけ」というように、強調としておかれた言葉を繰り返すこともある。例えば、「この珠、そしてこの珠だけが、そうである」のように。〈よね〉は「米」に相当する〈こめ〉の古い〈大和〉表現であり、脱穀してもみ殻から洗浄されたあとの状態の米のことである。日本人にとって米は非常に重要な文化植物であるから、様々な名称が存在するのである。米の学名は *Oryza Sativa*、田植え前の種付け畑の若い芽の息吹は〈なへ〉と呼ばれている。植えられた青い植物は〈いね〉であり、脱穀する前の成長した米粒は〈もめ〉である。これが炊かれたら〈めし〉となる。〈なれ〉と〈よけれ〉は、「～である」を意味する〈なり〉、ならびに「良い」を意味する形容動詞〈よい⁽⁸⁾〉の過去形である。

5 - 2. 言葉遊び：〈兼用言〉

さらにここで、日本文学でよく目にする特徴のひとつである〈兼用言〉

(*)という言葉遊びについて言及しておこう。まったく異なった意味を持つ二つの同音異義語が、文の構造上できるかぎり近くに配置されて、互いに入れ替わることで、前にあった概念が後ろの構成要素となり、後ろにあった概念が前の構成要素となる言葉遊びである。これはときおり無理な語呂合わせにしかみえないこともない。しかしこの遊びは、平靴ソックスを履いて気楽な日本文学に忍びよってくるだけでなく、高靴コトウルンを履いて威厳に満ちた態度で、悲劇の女神の高貴な作品をかけ抜けることで、韻律の文体に優雅な装飾を施してくれるのである。⁽⁹⁾〈兼用言〉以外にも、言葉遊びは日本で非常に好まれている。〈こへ〉と〈よみ〉から同じ漢字を二重解釈することで成立する言葉遊び、あるいはドイツ語にもあるように、類似した音を持つ異なった語の言葉遊びなど。前者の例としては、「愛」と「色彩」という二重解釈をもつ〈いろ〉という言葉について、すでに考察した。後者の〈兼用言〉の例としては、〈なく〉という言葉が〈いきたきこちなくばかり〉として用いられている例を挙げよう。これは「生きることは重い重責であって、涙が唯一の慰めとしてでてくる」という意味である。(**)

〈忠臣蔵〉は言葉遊びが豊かな作品で、「家臣の忠義」においては、可能な限りの言葉遊びが再現されている。⁽¹⁰⁾

(*)〈兼用言〉は言葉遊びであり、何かを二重目的に用いるという中国語〈兼用〉から来ている。〈けん〉は「二重の、数回の」の意で、〈よう〉は「利益の対象」のこ、〈げん(げんごん)〉は日本語の〈ことば〉と同じ意味で「単語」を指す。

(**)〈いきたき〉の〈いき〉は「生きる」の意、〈たき〉は、第一変化活用の形容動詞につけられた変化する〈てにをは〉、前に置かれた動詞に心から願う力を与える要素。最新の言語形である。よって〈いきたき〉が意味するのは、「生きることを心から願う」こと。〈こち〉は、「気分、感情」を表わす〈こころもち〉に関連づけられている。〈なく〉はここでは二回読まれなければならない。最初は、「存在しない、持たない、死んだ」を意味する形容動詞〈な

い)の連体形。二つ目は、「泣く、泣き叫ぶ」を意味する〈なき〉の連体形である。〈ばかり〉は「ただ、だけ、それだけ」の意である。

注釈として。このような文法例の詳細な分析は、たとえ本書の企画から遠く離れていようと、日本語文法の構造について短くまとめた説明を理解するための支援として役立っているといえよう。

訳者注

- (1) アルタイ諸語とは、比較言語学上、関係が深いとみられる北東アジアから東欧にかけての諸言語のこと。その関係性については諸説あり、ここに日本語や朝鮮語が含まれる場合もあるが、日本語は「特徴の全てを備えている」わけではない。アルタイ語族とは、アルタイ諸語が共通の祖語を持っていたという古い学説であるが、その証明は依然困難なままである。
- (2) ドイツの言語学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(1767-1835)と文学者アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル(1767-1845)によって提起された言語の形態論的分類のひとつ。単語に接頭辞や接尾辞をつけることで、文中の関係を表わすという特徴をもつ。日本語や朝鮮語の他に、カザフ語、ウイグル語、トルコ語、ハンガリー語、フィンランド語などが、この膠着語に分類されている。
- (3) ウィリアム・ジョージ・アストン(1841-1911)は英国外交官であり、アーネスト・サトウと並んで、初期の重要な日本学研究者の一人。
- (4) 江戸後期の国学者である鈴木重胤(1812-1863)が、弘化二年(1845)に上梓した全五冊からなる日本語の文法書。音韻・体言・用言・活用・雅言などについて詳述している。この時代、名詞と動詞は体言と用言に大別され、体言は有形・無形・用語・用略・二合に、用言は、四段・一段・中二段・下二段・変格・形状に細分されていた。活用は、将然言・続用言・絶定言・続体言・既然言と表現され、形容詞などの概念はなかった。
- (5) 「第五だけはしばんと発音するのではない」とあるが、前後の説明が通じないので、「第四だけは」に訂正した。
- (6) 原文では「過去形」とあるが、ここは「命令形」ではないかと推測される。鈴木重胤は命令形のことを「既然言」と呼んでおり、すでにおこなわれた様子(例：見せばや)をあらわす活用形とする。その影響を受けたのであろう。
- (7) 同様。
- (8) 同様。
- (9) ソックスとは、舞台俳優が履く低く平らな底の靴のこと。コトゥルンとは、ギリシア悲劇の俳優が履く高下駄のこと。
- (10) 『瑞穂草 第一部』に記載。